

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目 能動的及び受動的意味を表す日本語の機能動詞結合の研究
氏 名 朱 薇娜

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は現代日本語における能動的及び受動的意味を表す機能動詞結合について論じるものである。日本語には、「影響する」に対する「影響を与える」や、「誘われる」に対する「誘いを受ける」のような迂言的な表現が存在する。これらの表現における「与える」や「受ける」などの動詞の部分は意味が稀薄化し、主に文法的な役割を担っている。本研究では、「与える」と「受ける」の対立をめぐって、「影響を与える」、「考察を加える」、「誘いをかける」のような能動的意味を表す機能動詞結合のグループと、それと対立する「影響を受ける」、「迷惑をこうむる」、「注目を浴びる」のような受動的意味を表す機能動詞結合のグループに焦点を当てて考察する。

本研究は6章から構成されており、各章の内容は以下のようなものである。

第1章は序章として本研究の目的、考察対象、構成について説明する。本研究は主に4つの目的を持っている。まず、機能動詞結合を1つの構文と見なし、機能動詞結合構文における動詞の要素と名詞の要素を分けてそれぞれ考察することを本研究の第1の目的とする。次に、機能動詞結合構文と対応する動詞構文やレル・ラレル形の文法的受身文との相違点を考察することを本研究の第2の目的とする。さらに、この考察から得られる結論を踏まえて、機能動詞結合構文の特徴と機能を明らかにすることを本研究の第3の目的とする。最後に、中国語の形式動詞構文との対照を通して、日本語の機能動詞結合構文の特徴を探ることを第4の目的とする。

第2章では先行研究を概観し、その問題点を指摘し、本研究の課題を明らかにする。まず、機能動詞の定義や機能動詞の全体像を記述している村木（1991）を概観し、機能動詞の種類や特徴を整理する。次に、動詞構文との比較を通して迂言的な形をした機能動詞結合構文の特徴や、機能動詞結合構文を用いる動機づけを究明する必要があることを主張する。さらに、考察の際に援用する諸概念を確認する。具体的には、動詞と対応する名詞の関係を示す行為連鎖（影山 1999、2002、2011）、他動性の高低を測る10項目のパラメーター（Hopper & Thompson 1980）、名詞句階層（角田 1991）、多義語の中心義の認定方法（瀬戸 2007）、多義語の意味拡張の動機づけに関するメタファー、メトニミー、シネクドキー（Lakoff 1987、初山 2002、鍋島 2011）などが挙げられる。

第3章では能動的意味を表す機能動詞結合構文について考察を行う。日本語には「影響する」を「影響を与える」、「暴行する」を「暴行を加える」、「磨く」を「磨きをかける」と言い換えられる

ように、単一の動詞で表しうる意味を「名詞＋格助詞＋動詞」で言い表す現象がある。この章では、「与える」、「加える」、「かける」の3語に焦点を当てて機能動詞結合構文と動詞構文の共通点と相違点を考察する。この3語は、「NP1 ガ NP2 ニ VN/DN ヲ FV」という同一の統語構造を持っており、以上の例に示されるように、他者への働きかけを表す点で動詞構文の「NP1 ガ NP2 ヲ/ニ VN スル/DN ル」に対応する。考察の結果は次のようにまとめられる。

「与える」の基本義は〈目上のヒトが目下のヒトに何らかの物をあげる〉となる。機能動詞結合構文における「与える」は、他動性の高い語（外的活動、言語的活動）と共起する場合、二格にヒト名詞をとりやすい傾向があり、「与える」の基本義が生かされている。他動性の低い語（心的活動、好ましくない影響）と共起する場合、主語の動作主性を要求せず、無生物主語他動詞構文の形をなしており、使役のマーカの機能を果たしている。また、機能動詞結合構文と動詞構文との関係は複雑な様相を呈している。「罰」や「援助」のような外的活動を表す語と共起する場合、機能動詞結合構文では二格にヒト名詞をとりやすいのに対して、動詞構文はこのような制限がないため、包含関係をなしている。「感動」や「誤解」のような心的活動を表す語と共起する場合、心的活動を表す各語に対応する動詞形式の他動性の高低に応じて2つの構文の関係が異なる。動詞形が自動詞となる語（e. g. 「感動、喜び」）の場合、機能動詞結合構文が動詞構文の使役形と対応するため、2つの構文は補完関係をなしている。動詞形が他動性の低い他動詞となる語（e. g. 「感じ」）の場合、機能動詞結合構文が一部の動詞構文の使役形と対応するため、2つの構文は補完関係をなしている。心的活動を表す語のうち、動詞形の他動性が最も高い語である「誤解」は、機能動詞結合構文が動詞構文の使役形、受動態の2つと対応しており、特徴的である。「潤い」や「影響」のような外的活動と心的活動の両方として捉えうる語と共起する場合、2つの構文の関係は語によって異なる。動詞形が自動詞となる「潤い」は意味により関係が異なる。外的・物理的な「潤い」を表す場合、機能動詞構文は動詞構文の使役形＋α（「ことができる」等）と対応しており、心的・抽象的な「潤い」を表す場合、機能動詞結合構文は動詞構文の使役形と対応している。「影響」の場合、動詞構文は主格にヒト名詞をとりにくいという制約があるのに対して、機能動詞結合構文はこのような制約がないため、2つの構文は逆包含関係（機能動詞結合構文が動詞構文を包含する）をなしている点で、特徴的である。「刺激」の場合、2つの構文は対応関係（意味のずれが少なく基本的に置き換えられる）をなしている。「注意」や「示唆」のような言語的活動を表す語と共起する場合、機能動詞結合構文が二格にヒト名詞をとり、受け手を前景化させる機能があるのに対し、動詞構文が主に言語的活動の内容を表すものを対象にとるため、2つの構文は一部対応関係をなしている。「損傷」や「変化」のような語と共起する場合、機能動詞結合構文が動詞構文の使役形と対応するため、2つの構文は補完関係をなしている。なお、「ショック」や「感銘」、「被害」などのような対応する動詞形式が存在しない語の場合、いずれも動詞構文が欠如している。

「加える」の基本義は〈ヒトが物の上や中に他の物をたす〉となる。「加える」を用いた機能動詞結合構文は、動作主性の高いものが主語に立つのが一般的で、他動性の高い構文である。「一撃」や「刺激」のような力的作用を表す語と共起する場合（「害、制限、規制、制約」等の数語以外）、機能動詞結合構文と動詞構文の基本形は基本的に置き換えられ、対応関係をなしている。一方、「修正」や「説明」のような知的作用を表す語と共起する場合、「加える」の基本義に基づいた「対象の上にさらに/新たに」という〈追加〉の意味が前景化しやすく、2つの構文は一部対応関係をなしている。

「かける」の基本義は〈ヒトがある場所に物を設置する〉となる。「かける」を用いた機能動詞結

合構文は、動作主性の高いものが主語に立つのが一般的で、他動性の高い構文である (e. g. 「国際捕鯨委員会は各国の捕鯨に規制をかけている」vs. 「*親の過保護は子供の自立心に制限をかける」)。動詞構文との根本的な違いは、動作主から対象への働きかけのプロセスを際立たせる機能があるのに対して、対応する動詞構文の基本形や使役形は対象へ直接的に動作/変化を加えることのみを表す点にある。したがって、動作は直接的か間接的かの面で差があり、NP2 が一致しないことが多い (e. g. 「{ボール/椅子/エンジン/体 etc. } を回転させる」vs. 「{ボール/*椅子/*エンジン/*体 etc. } に回転をかける」)。なお、類像性の観点から見た場合、構造的結束性の高い動詞構文は意味の結束性の高い直接的な事態を表し、構造的結束性の低い機能動詞結合構文は意味の結束性の低い間接的な事態を表すということは結束の類像性の表れともいえる。また、他動性の低い心的活動を表す語と共起する場合、機能動詞結合構文は受け手を前景化させる機能がある。

第4章では受動的意味を表す機能動詞結合構文について考察を行う。レル・ラレル形の文法的受身文と比較するために、「影響を受ける」や「非難を浴びる」のような受動文に対応する機能動詞結合構文を「機能動詞を用いた語彙的受身文」と呼ぶことにする。この章では、「受ける」、「こうむる」、「浴びる」の3語に焦点を当てて文法的受身文と語彙的受身文の共通点と相違点を考察する。「受ける」は、「影響を与える」と「影響を受ける」、「打撃を与える」と「打撃を受ける」、「感銘を与える」と「感銘を受ける」といったペアが存在するように、意味的に能動と受動の対立をなす上に、生産性が最も高い。「こうむる」は、「迷惑をこうむる」や「被害をこうむる」などのように、主に〈不利益〉を表す語と共起し、〈迷惑性〉を含意する一部の文法的受身文に通じるところが多い。「浴びる」は「かける」と同様に、〈液体〉と〈発話行為〉の両方と共起できる。また「銃撃を浴びる」や「連打を浴びる」のような〈身体に対する攻撃〉を表す動作性名詞とも共起できるため、ある程度の生産性を持っている。考察の結果は次のようにまとめられる。

「受ける」の基本義は意図性・意志性が読み取れる①〈ヒトが物を受け止める〉と、文脈の影響で意図性・意志性が読み取れる②〈ヒトがヒトからものを受け取る〉の2つがある。「受ける」を用いた語彙的受身文は、「働きかけてくる側と、それを受ける主体との二者関係の上に成り立つ」ため、基本的に文法的受身文の1種である受影受動文と対応関係をなしやすい。「受ける」を用いた語彙的受身文とレル・ラレル形の文法的受身文との関係は動詞の統語構造の影響を受けている。「有情物 NP1 ガ有情物 NP2 ヲ V」という統語構造をとる対人外的活動の二項動詞（「攻撃、支援、処分 etc.」）の場合、文法的受身文と語彙的受身文は対応関係をなしやすい。「有情物 NP1 ガ有情物 NP2 ニ何か NP3 ヲ V」という統語構造をとる三項動詞（「融資、支払い、報告、説明 etc.」）の場合、「有情物 NP2」が主語に立つと語彙的受身文は成立しやすくなり、「何か NP3」が主語に立つと降格受動文は成立しやすくなる。なお、「有情物 NP2」が主語に立つ受影受動文は〈迷惑性〉を含意する方向に解釈されやすい。〈受影性〉は文法的受身文の1種である受影受動文の成立を左右する大きな要因であるが、多くの場合、〈迷惑性〉として捉えられる。一方、語彙的受身文は「ために」や、「ようにしよう」、「ことができる」といった意図性・意志性を帯びた表現とも共起でき、〈迷惑性〉と正反対の構文をなすことができる。この場合、2つの構文は補完関係をなしている。複文レベルでは、「事態 A を受け（て）、事態 B」文と間接受身文は2つの事態を〈受影性〉により結びつけるというところで共通の基盤を持っている。しかし、一般的に話し言葉に用いられ、〈迷惑性〉を成立の前提とする間接受身文とは異なり、「事態 A を受け（て）、事態 B」文は主に書き言葉に用いられ、幅広く2つの事態を結びつけることができる。また、この文の前件事態 A と後件事態 B は主に2つの意味関係を持っ

ている。一つは「事態 A があって、その影響で事態 B がある」ということであり、もう一つは「事態 A があって、それに対応するために事態 B を行う」ということである。

「こうむる」を用いた語彙的受身文では、「こうむる」と共起するのは、主に〈不利益〉を表すもの（「損害、不利益、損失、被害、苦痛 etc.」）と、〈災害〉を表すもの（「惨禍、原発事故、災い、災害、戦災 etc.」）であり、いずれも VN/DN ではない。そのため、文法的受身文とは対応しないが、「受ける」を用いた語彙的受身文とは基本的に置き換えられる。なお、実例は少ないながら、「こうむる」は一部の VN/DN と共起できる。時代小説における古めかしい表現（「怒り、咎め etc.」）や、外部の影響を受けて生じた変化や変容を表すのに用いられる（「変化、変容」）など、いずれも特殊な表現である。

「浴びる」の基本的な意味は〈ヒトが液体や光のような物を身の広い部分に受ける〉となる。「浴びる」を用いた語彙的受身文は「浴びる」の基本義からメタファーやメトニミーに基づき拡張した構文で、文学的な表現であると考えられる。「非難、批判、喝采、称賛 etc.」のような人間の言語的活動を表す語、「注目」のような人間の視線を表す語、「連打、銃撃、本塁打 etc.」のような人間の外的活動を表す語が「浴びる」とよく共起し、文法的受身文や「受ける」を用いた語彙的受身文と置き換えられることが多い。一方、「浴びる」を用いた語彙的受身文は多数のヒトからの行為を受けることをデフォルトとしている点でほかの 2 つの構文と一線を画している。なお、外的活動を表す語と共起する場合、行為自体の〈複数性〉が際立っている。

第 5 章では中国語の形式動詞構文と日本語の機能動詞結合構文の対照を試みる。中国語の形式動詞は、もっぱら動作を表す名動詞と共起し、実質的な意味がほぼ希薄化しているのに対して、日本語の機能動詞は、実質名詞とも共起し、実質の意味と機能的意味の両方を兼ねている。多義性の観点から考えると、機能動詞と共起する名詞は実質名詞から動作性名詞への抽象化が生じており、メタファーに基づいた意味拡張であると考えられる。これが中国語の形式動詞と日本語の機能動詞の根本的な違いであると考えられる。また、機能の面においては、日本語の機能動詞も中国語の形式動詞も、動詞として使えない動作性名詞（元々動詞として使えない動作性名詞と、連体修飾成分の前接が原因で引き起こされる名詞的な特徴の際立ちにより、動詞としての機能を失った動作性名詞の 2 種類がある）と共起し、動的事態を表す機能があるという点で一致している。一方、中国語の形式動詞は、前置された目的語を標示する機能があり、「把」構文や「对（于）」構文などのような「目的語を前置しなければならない」という構文では目的語前置のマーカースとして機能するのに対して、本来 SOV 語順の日本語にはそのような構文が存在しないため、日本語の機能動詞には目的語前置を標示する機能はない。文法化の観点から見ると、中国語の形式動詞は目的語前置を標示するという統語的な機能があり、文法化の程度が高いのに対して、日本語の機能動詞は意味が完全に希薄化しているわけではなく、機能動詞結合構文においてその基本義が生かされたり、語結合全体で 1 つのまとまった意味を表したりしていることから、文法化の程度が低いと言えよう。

第 6 章は終章として、本研究の結果と結論をまとめ、本研究の意義及び今後の課題を述べる。今までの機能動詞の研究は動詞構文と機能動詞結合構文が同義性を保っているという前提に立って議論をなされてきたが、本研究は 2 つの構文を比較することを通して、2 つの構文は 6 種類の関係を持ち、機能動詞結合構文が機能動詞の意味的・統語的な制約を受けることを明らかにした。今後の課題として、①「出す」、「食らう」などの他の語も考察の対象にして能動的及び受動的意味を表す機能動詞結合の全体像を明らかにすること、②本研究では、主に機能動詞結合構文と動詞構文の対応関係という観点から考察を行ったが、今後複合動詞研究におけるコンストラクション形態論の知

見 (Booij 2010) や研究手法 (陳 2015 等) を援用し、2 つの構文の統語構造の継承関係を論じること、③能動的及び受動的な意味を表す機能動詞結合のみならず、アスペクト表現やムード表現などにおける語彙項目から文法項目への浸透現象に対する考察をすること、④修飾成分とする形容詞・形容動詞の意味や性質に関する考察をすること、⑤書き言葉における機能動詞結合構文の特徴的な統語構造を考察すること、⑥英語の軽動詞構文やドイツ語の機能動詞構文などと比較し、通言語的な考察を通して、機能動詞の位置付けを明らかにすること、⑦文末表現の追加で機能動詞結合構文を成立させるという言語現象はモダリティに関わるため、モダリティ研究の知見を援用しアプローチする必要があることという 7 点が挙げられる。